

目的 明治時代は 封建社会から近代社会への転換期であるが、衣生活の上でも画期的な変革の時期であった。すなわち身分による衣服統制が廃止され 続いて礼服をはじめ軍服、職能服に洋服が採用され 直垂 狩衣 上下が廃止された。しかし このような政治的要請に基づく上からの近代化政策が はたしてどこまで一般庶民の衣生活にまで浸透していったのだろうか。明治政府の欧化政策に関連して 衣生活における洋装化の過程を調べることにより その実態を解明しようとした。

方法 明治政府の成立から 鹿鳴館風俗のもたらした洋装熱の興隆期とされる明治20年頃までを明治前期と定め 研究対象とした。資料としては、新聞集成明治編年史を主として用い 風俗画、錦絵、当時の洋裁書などを 参考資料とした。

結果 明治前期は 生活に浸着した風俗の問題に政府の欧化政策が大きく介入した時期ではあったが、それは直接庶民の衣生活の洋装化には結びつかなかった。特に女子の洋装は皆無に近かった。このような洋装化における男女差は 洋服そのものの形態上の問題もあるが、女子の社会的地位が低く 社会進出の場が閉ざされていたことも原因のひとつといえる。この時期の洋装者は 制度として職業の中で着用した軍人、羅卒、郵便夫の他、欧化主義の実践者である政府の役人や 西政文明を理解し 洋装の機能性に気づいていたと考えられる学者や医者のような知識階級であった。以上のような人々の洋服姿をはじめ明治政府の近代化政策による急激な風俗の変化は それをうけとめる庶民の生活基盤と意識に めざましい変化をあたえたものと思われる。